

## 事例研究：和解に必要な条件

### 1. 和解のための精神的基盤の必要性

#### (I) MRA の活動事例の検証

東京大学法学部助教授 城山英明

冷戦後の紛争解決、特に内戦の解決では、諸勢力間の心理的和解が紛争解決と国づくりの基礎として極めて重要になる。そして、この心理的和解醸成の過程では、非公式的な活動が可能な NGO (非政府組織) に一定の比較優位があると考えられる。ここでは、NGO である MRA (Moral Re-Armament: 道徳再武装) の活動について具体的に検証する。

MRA は「各個人が自らを変えることによって、社会、世界を変える」運動であり、牧師のブックマンがナチスドイツの全体主義に対して物理的再軍備ではなく精神的な力を動員することで対抗することを目的として、1938年に設立した。MRA では、「他人の過ちに注目することではなく、自らの過ちを認めることから始めなくてはならない」とのブックマンの言葉からも分かるように、一方の「謝罪」と他方の「許し」の連鎖によって紛争当事者間の心理的障壁を除去するという方法が用いられた。第二次世界大戦後 MRA は、スイスのコーに一流ホテルとして建てられたマウンテンハウスを活動拠点として確保し、現在に至るまで各国からの人々の交流の場を提供してきた。

以下では、大戦後の独仏和解、ローデシアからジンバブエへの移行過程における黒人・白人諸勢力の和解、カンボジアの内戦終結過程での諸勢力の和解の三つの事例を取り上げて、MRA の活動の役割を具体的に明らかにし、最後にその活動の評価と特質について若干述べておきたい。

#### 第二次世界大戦後の独仏和解—ヨーロッパ統合の起源

##### 背景

ヨーロッパ近現代史では、独仏の対立はナポレオン戦争、第一次世界大戦、第二次世界大戦等の多くの戦争をもたらした

てきた。第二次世界大戦後の ECSC (ヨーロッパ石炭鉄鋼共同体) 創設を起源とするヨーロッパ統合は、この独仏間の歴史的和解をもたらしたという点で画期的であった。

ルール、ザール地方の石炭、鉄鉱は、かねてから独仏間の紛争の火種であり、これらの資源の共同管理は古くから提案されてきたが、なかなか実現しなかった。第二次世界大戦後、これらの資源は占領当局の支配下におかれ、ルールの石炭の管理主体としてルール国際機関 (IAR) が設立された。当初フランスは、これらの資源の多くをフランスに送り、ドイツの利用は最低限にとどめるべきであるという態度をとっていたが、1949年3月の外相会議を契機としてドイツとの協調路線へと転換を始めた。IAR の枠組の下での協調は、米仏が組織のあり方をめぐって対立したため失敗し、独仏の主導で協力が図られることとなった。50年5月にフランスのシューマン外相が「他のヨーロッパ諸国にも開かれた一つの組織の枠組内でドイツとフランスの全石炭・鉄鋼生産を共通の最高機関の下におく」という提案を行い、実質交渉が開始され、アメリカの圧力もあり、51年4月に ECSC 条約が調印された。

##### MRA の役割

MRA は二つの局面で一定の役割を果たした。

第1に、独仏間の草の根での民間交流を促進した。マウンテンハウスを1946年夏に訪れたブックマンが最初に発した言葉が「ドイツ人はどこにいるのか」という言葉であったことから分かるように、ブックマンは「ドイツ人を抜きにしてヨーロッパの再建を行うことは不可能であろう」という認識を持っていた。1946～50年のコーへの参加者はフランスから1,983人、ドイツから3,113人に上った。占領下のドイツではドイツ人の出国や外国への入国が厳しく制限されていた

め、ドイツ占領当局からの出国許可の確保とスイスからの入国許可の確保は MRA の提供できる貴重な資源であった。この民間交流は、ドイツ人とナチの被害者の間での精神的和解を可能にする場を提供した。例えば、子どもたちが目前でナチのゲシュタポの拷問を受けたため、ドイツ人に対し激しい憎悪を抱いていたフランス人のイレーヌ・ローは、1947年のコーの会議で、ヒトラーの暗殺を企てたとして、自分の夫をナチに処刑されたドイツ人の未亡人が「ヒトラーに対して、われわれドイツ人がより早くより激しく抵抗しなかったことを大変後悔している」と発言したのを聞き、数日後の会議で「私はドイツを大変憎んできたため、ドイツをヨーロッパの地図から抹殺したいと考えてきた。しかし、私は私の憎悪が誤りであることに気付いた。どんな理由があれ憎しみは新たな対立を生み出す。憎しみに打ち勝つのは愛しかない。私は、ここにいるすべてのドイツ人の許しを請いたい」と「謝罪」するに至った。

第2に、ECSC 設立に関してシューマン外相とドイツのアデナウアー首相という相互に信頼し得る交渉当事者の「橋渡し」を行い、交渉を進展させるよう当事者を勇気づけた。アデナウアーは1948年9月にコーを訪れた人々の一人であり、ブックマンは49年10月にシューマンに信頼すべき人物としてアデナウアーを紹介し、独仏和解を積極的に支援した。ECSC 条約調印後、アデナウアー自身がニューヨーク・ヘラルドトリビューン紙の「シューマンプラン協議における MRA の役割が証明される」と題する記事において、「交渉当事者の意見の差異を橋渡しし、交渉当事者に共通善を希求する平和的解決という目的を提示することによって、MRA は目には見えないが実効的な役割を果たした」と総括している。

独仏和解やヨーロッパ統合が可能となった要因としてしばしば冷戦の要素が強調される。しかし、ヨーロッパにおいて冷戦が激化したのが1948年～49年であったのに対して、MRA は早くも46年から活動していたのであり、MRA 活動は一つの独立した要因であったと評価することができる。

#### ジンバブエの独立—脱植民地化における黒人・白人諸勢力間の和解

##### 背景

第二次世界大戦後のアフリカの脱植民地化の移行過程では

白人植民者と黒人との間の和解が重要な要素であった。ローデシアからジンバブエへの平和的移行は、最近の南アフリカの事例に先立つ成功例であった。

イギリス自治領のローデシアでは、黒人の政治過程参入に反対する白人層がイアン・スミスの下で人種差別主義を主張するローデシア・フロントを形成し、1965年には一方的独立宣言を行った。それに対し、国内ではムガベ指導下の ZANU (Zimbabwe African National Union)、ンコモ指導下の ZAPU (Zimbabwe African Peoples Union)、ムゾレワ指導下の ANC (African National Council) という三つの黒人勢力が政府に対抗した。このうち、ZANU と ZAPU は政府とゲリラ戦を行い、70年代から戦闘は特に激しくなった。

また一方的独立宣言を行ったローデシアに対し、イギリスは、「アフリカ人多数支配が行われない前にローデシアに独立は与えない」という原則を表明し経済制裁を行い、その後も和解を試みたが成功しなかった。また、周辺の前宗主国諸国の主導で行われた1974年のルサカ会談、76年9月のキッシンジャーのシャトル外交、それに続く同年10月のジュネーブ会談による和解の試みも失敗した。他方、スミスは78年3月に黒人穏健派(ムゾレワ等)との間で国内解決の合意に達し、79年4月に選挙を行い、選挙の結果ムゾレワが首相となりイギリスにも承認を求めた。イギリスのサッチャーは、制裁の解除も考えていたが、同年8月にルサカで開催された英連邦会議でサッチャーの方針はオーストラリア等から反対を受けたため、イギリスは再度国際的解決を模索することになり、9月から12月にかけてロンドンのランカスターハウスで交渉が行われた。イギリスが強硬な姿勢をとり、両当事者の中で各々強硬なスミスとムガベを孤立させるようにした結果、憲法、移行期取決、停戦の三つについての合意に達した。また、移行期の秩序維持機関としては英連邦の監視軍1,200人を導入することとなった。

1980年2月2日～29日に投票が行われ、同年3月4日に選挙結果が発表された。結果はムゾレワが率いる UANC (統一アフリカ人民族会議) が3議席、ムガベが率いる ZANU が57議席、ンコモが率いる ZAPU が27議席であった。その日の夕方ムガベがテレビ番組に出演し、「全国民が手を取りあってい

こう。勝者、敗者のいずれにも敬意を払おう。われわれには少数派を抑圧する気はない」と述べ、選挙前の白人の危惧に反して和解を求める姿勢を示した。翌日には、イアン・スミスが、白人に対して冷静さを失わず、国を出ないよう訴えた。そして、ZANU 党首ムガベを首班とする内閣が構成され、4月18日にはジンバブエ共和国として独立した。

#### MRA の役割

MRA は三つの局面で一定の役割を果たした。

第1に、白人、黒人各集団間の交流促進を行った。MRA の白人勢力への接点はイアン・スミス首相の息子であるアレック・スミスであった。アレックは、1973年に心の変化を経験して MRA の活動にも参加し始め、自発的に黒人への「謝罪」も行った。また、黒人勢力に対しては MRA は ANC 幹部との接点も持ち、MRA 活動家のマクニコルは現地に滞在するようになる。彼らの努力により75年に首都ソルスベリーの大学で MRA の国際会議が開催され、政府閣僚を含む1,000人以上の黒人、白人のリーダーが参加した。その後、UANC の幹部であった黒人のカナデリカやスミス政権の上級幹部も含む「良心の内閣」が形成され、さまざまな和解促進の試みを行った。映画「フリーダム」（黒人多数支配を目指す中で、個人の野心やエゴは国に分裂をもたらす自由を奪ってしまうものであり、国の真の自由は各派の和解と許しに基づいてのみ建設されることを描いたもの）の上映を各地で行い、食事等の機会を使って個人間のネットワークづくりも行った。コーの MRA 会議にも、1975～79年にかけてジンバブエから毎年約10～20人を招き入れた。

第2に、公式交渉の支援を背後で行った。1976年のジュネーブ会議の際には、マクニコルらは何度もムゾレワほかの UANC の会議参加者と朝食をとった。このジュネーブ会議は公式には具体的な成果は得られなかったものの、非公式には実りのあるものであったという。ランカスター会議の際にも夜に交渉参加者とのさまざまな非公式の会合が持たれた。イアン・スミスもロンドンの MRA ゲストハウスを訪れた。また、ランカスター会議にサッチャーを関与させる上で大きな転機となった79年8月のルサカでの英連邦会議においてもオーストラリアの MRA 関係者、グリフィスが大きな役割を

果たした。グリフィスはキャリントン英外相等と接触した際の内容を基に、他の英連邦諸国と連合を形成し、イギリスに対して多数派支配の原則を維持することを求めるべきとの提言をオーストラリアのフレーザー首相に対して行い、そのとおりフレーザー首相は行動し、成果を得た。さらに、選挙投票後かつ結果発表前には、MRA はそれまで互いに罵りあっていたイアン・スミスとムガベの会談の場を設定し、両者を和解への道にコミットさせた。

### カンボジアにおける内戦終結—冷戦後の紛争解決

#### 背景

1970年のロンノル將軍によるクーデター、75年4月のポルポト派によるプノンペン制圧、79年のベトナム軍のカンボジア侵攻とそれに支援されたプノンペン政権（担い手の人民革命党は後に人民党と改名）の樹立に見られるように、カンボジアの政情は不安定であった。そして、ポルポト派（民主カンボジア党）、シアヌーク派（後にフンシンベックを組織）、ソン・サン派（後に仏教自由民主党を組織）という三つの集団がプノンペン政権に対抗していた。やがて、これらは82年に三派連合を形成し、中国、西側諸国の支持を得た。

1987年12月にパリでシアヌーク、フンセン（プノンペン政権）非公式会合が行われ、地域レベルではインドネシアの主導によりジャカルタ非公式会合が88年7月、89年2月に開催され、さらにインドネシアとフランスの主導により89年7月に第1回パリ会議が開催された。しかし、移行期の暫定政権におけるパワーシェアリングの問題で交渉は難航し決裂した。その後、移行期にはパワーシェアリングによってではなく、カンボジアを事実上国連統治下におくというオーストラリア案が提示され、90年1月以降この案を基礎に国連安全保障理事会の5常任理事国(P5)が案を作成し、同年9月のジャカルタでの会合で国内4派も基本的に P5案を基礎として交渉することに合意した。そして、最終的には、91年10月の第2回パリ会議でパリ和平協定が調印された。

1992年3月にはパリ和平協定に基づき大規模な UNTAC（国連カンボジア暫定統治機構）が設置された。UNTAC は一般行政部門、動員解除ではプノンペン政権やポルポト派のコ

ントロールに失敗した。にもかかわらず UNTAC が成功した要因に UNTAC の情報活動があった。UNTAC 情報教育部門の運営する UNTAC ラジオ局は中立的な報道内容で市民の信頼を集め、選挙の持つ政治的意味や投票の秘密が保持されることを繰り返し伝えることで選挙への参加を促し、民主主義の伝播に役立った。その結果、ポルポト派が選挙不参加を表明したものの、93年5月に89.56%の高投票率の選挙が行われた。

#### MRA の役割

MRA は二つの局面で一定の役割を果たした。

第1に、諸集団のエンパワーメントと諸集団間での交流促進を行った。日本の MRA は、難民を助ける会が人道援助をソン・サン派キャンプにつないだのを契機としてソン・サン派との接点が拡大した。具体的には、ソン・サン派の難民キャンプを国際的な MRA のグループが訪問し、民主主義と自己責任の教育を行った。また、1984年以来キャンプの指導者等を小田原の MRA アジアセンターの会議やコーの会議にも迎えた。さらに、オーストラリアの MRA はワールドビジョンという NGO を通してプノンペン政権との接点を持っており、プノンペン政府関係者が政府の承認を得てコーに来られるようにした。以上のようなネットワークを利用して、MRA は選挙直前の93年3月に「カンボジア平和のための信頼づくり」と題する第1回セミナーをプノンペンで開催し、そこにポルポト派以外の各派、UNTAC の選挙局長、情報局長等が参加した。セミナーではジンバブエやスーダンの紛争和解の経験も紹介され、セミナーの後には国民和解委員会が結成された。また、選挙後の1994年3月には、新たな国づくりを支援するための第2回セミナーを「社会変革の鍵となる心の変革」と題して開催した。この会議には、シリウット外相やサム・レンシー蔵相等多くの閣僚の参加、英仏の議員の参加を通して、国内外からの国づくりへの支援を得るのに役立った。UNTAC 成功の秘訣であった情報宣伝活動においても MRA は、独仏和解に貢献したイレヌ・ローについてのビデオ「明日を愛するが故に」を広く上映したり、民主主義の基礎を分かりやすく述べたパンフレットである「Which way Cambodia ?」を作成配布 (UNTAC も用いた) したことで一

定の役割を果たした。また、カンボジア MRA のレニー・バンも UNTAC 文化教育担当として UNTAC ラジオ番組づくり等に貢献した。

第2に、公式交渉の側面支援を行った。1989年の第1回パリ和平会議の際には、パリの MRA センターでソン・サン派、シアヌーク派、ポルポト派の会合が頻繁に開催された。また、P5が和平案を作成していた重要な時期である90年夏にはソン・サンがコーに来た。その際、非公式にポルポト派のジュネーブ駐在大使がジュネーブ空港でソン・サンに会い、また、その後コーに来てテラスで虐殺の謝罪をした。当時ソン・サンは P5案に悲観的であったが、グリフィスらは包括和平のメリットについて話し、それが必ずしもベトナム有利とはならないと説いて、国連主導の和平の動きに参加するよう説得した。

#### おわりに— 評価と特質

以上のような紛争和解の過程において MRA がいかなる役割を果たしたのかを厳密な意味で論証するのは難しい。確かに、さまざまな圧力行使をも伴う大国のイニシアチブ、地域的イニシアチブや常任理事国を中心とする国連の役割が包括和平決定の際には重要であった。しかし、以上の事例の検証により、MRA という NGO が紛争解決に不可欠な心理的和解、ネットワークづくり、情報教育活動において少なくとも一定の役割を果たしてきたことは理解できると思われる。

MRA の活動の最大の特質としては、個別的な紛争の直接的解決という「出口」を目標とするのではなく、「入口」すなわち信頼できる当事者間のネットワークづくりを目標としている点が挙げられる。紛争解決という微妙な活動では、最初から「紛争解決のために来ました」といって当事者に近づくことは当事者の警戒心を招き、状況をむしろ悪化させる。従って、紛争解決をあくまでも副産物と考える MRA の方法は重要なのである。ただし、「入口」重視で間口を広げすぎることは、外部からの別の意図を持った者の関与を可能にし、組織の「信用」を損なうかもしれないという「品質管理」の問題も惹起 (じゃっき) することとなり、注意も必要である。

(しろやま ひであき)

## (2) MRA コー会議報告

—国際シンポジウム

「21世紀に向けての和解への課題」より—

総合研究開発機構研究員

近藤 徹

1996年8月、NIRAは、MRAとCSIS(戦略国際問題研究所、米国)との共催により、国際シンポジウム「21世紀に向けての和解への課題」を、スイス・コーのMRA国際会議場(コー・マウンテンハウス)において開催した。本シンポジウムは、21世紀を対立ではなく和解の世紀とするための課題について検討するとともに、世界各地で平和の構築のために困難かつ慎重な作業に携わっている政治指導者、政府関係者、国際機関の職員、外交官その他の者たちの相互理解を深め、各人の能力を増進させることを目的として、8月10日～15日の6日間の日程で行われ、世界各国から700人以上の参加があり、日本からも各界から約50人が参加した。

このシンポジウムでは、初日に開会式、2、3日目に各セッションの討議が行われ、4日目にワークショップ、5日目に「都市における希望」と題されたフォーラム、最終日に閉会式が行われた。6日間、さまざまなテーマで議論がなされ多くの講演や発表があったが、本稿ではその中から、MRAの活動の象徴ともなっている第二次世界大戦後の独仏和解について取り上げたセッション「ドイツとフランス—パラダイムの経験」と、現在も多くの紛争を抱え困難な状況にあるアフリカについて焦点を当てたセッション「アフリカの経験から」、およびワークショップの一つとして行われた「歴史の傷—事実認識と癒しを求めて」についての概略を報告し、和解へのアプローチの一つとしてのMRAの活動について考察する。

### ドイツとフランス—パラダイムの経験—

第二次世界大戦が終戦を迎えて間もない1946年、MRAの会議がスイス・コーにおいて開催された。これが、現在まで続いているMRAコー会議の始まりである。以来ここは、数多くの出会いと和解の実践の場として、さまざまな歴史をつ

くり出してきた。その中でも、大戦後のドイツとフランスとの間の和解をとりもったのがMRA運動の創始者ブックマン博士であり、また、このコー・マウンテンハウスであったと言えよう。博士は、ドイツ人との協調なくしてヨーロッパの再建はないとして、戦後始めて開催されたMRAの会議にドイツ人を招き、ナチスドイツにより深い傷を受けた周辺諸国からの参加者との和解を推し進めた。

シンポジウムの最初のセッションにおいて、独仏和解の過程を検証することを目的とした議論がなされたことの意義は大きい。ベルリンの壁が崩壊したことで、東西ヨーロッパという区別が単に地理的な意味しか持たなくなった現在、このまさに混沌(こんとん)とした状況の中で、ヨーロッパは復興と繁栄を求めてさまざまな分野における「統合」を推し進めている。そして、このヨーロッパの統合ということ自体、独仏和解の過程で生まれ独仏和解の象徴でもあるヨーロッパ石炭鉄鋼共同体(ECSC)がヨーロッパ共同体(EC)となり、現在のヨーロッパ連合(EU)へと発展した歴史の延長線上にあるものにほかならない。すなわち、独仏和解の過程を検証することは、ヨーロッパの今後の発展の使命を負った「統合」という作業を進める上でも、非常に重要なことである。

ヘンリー・メニュディエ氏(パリ第三大学教授、フランス)が「第二次世界大戦後50年間も両国間の平和が続いたことは、その前の独仏戦争、第一次、第二次世界大戦の各戦間期がそれよりも短かったことを考えると特筆に値することであり、独仏の和解は成功したのである」と述べたように、この和解は、他国にとっての模範となると同時に、独仏両国

写真●コー・マウンテンハウス外観



ひいてはヨーロッパ全体の未来を考える際の大きな糧となるであろう。氏は、独仏の和解が成功した理由を四つ挙げた。それは第1に、両国は隣国として共通の歴史があり古くから続く戦争の歴史は共に苦い思い出を残してきたが、両国民の間の文化的交流や経済的交流が途絶えたことはなかったこと。このことは、力ではなく協調により両国間ひいてはヨーロッパの平和を構築する道を選択したことに表れている。第2に、コー会議において両国民の個人同士の多くの出会いがあったこと。フランスのロバート・シューマンやジャン・マネ、ドイツのアデナウアーらによってヨーロッパ復興のシナリオとも呼べるシューマンプランができたのも、コーでの出会いが基礎になっている。第3に、アデナウアーとド・ゴールによって1963年に独仏協定が結ばれ、これがその後の和解の基礎となったこと。この協定は、両国の和解、協力、連帯、友情をうたったものである。第4に、両国民の文化的、経済的交流がさらに深まっていったこと。姉妹都市提携による市民レベルでの交流も、大きな役割を果たしている。

フーベルトゥス・デスロフ氏（EU バーバリア州代表、ドイツ）は独仏和解の意義について、ドイツの側からの視点で見た場合、次のような特色があるとした。それは、まず紛争の原因を探求することから始めたこと、平和条約ではなく共同体の条約を結んだこと、そしてこの独仏協定が相互に不信感を生じさせないための象徴となったこと、である。

政治面での和解だけが両国の和解のすべてではなく、そこには個人レベルでの多くの和解があったことは言うまでもない。このセッションで、フランスとドイツから一人ずつ発表があった。フランスのジュリエット・ロー氏は、かつてはドイツ人を憎んでいた自分の母が、コーの会議に参加したことでドイツに対する憎悪を捨て、ドイツ人に対して許しを求めたことと、その母の「最も強い武器は沈黙である。その中で、他人の言葉そして自らの良心に耳を傾けなさい。憎悪は憎悪を呼ぶのであり、他を許すことで自らを憎悪から解放できるのである」という言葉を紹介した。そして、「未来のためにわれわれは心の鍵を回さなければならない」と自身の決意を述べた。次に、戦争中は従軍の看護婦であったというドイツのローズマリー・ハーバー氏は、コー会議に初めて参加したと

きにあるフランスからの参加者の言葉を聞いて感銘を受けたと述べた。このフランス人こそジュリエット・ロー氏の母、イレーヌ・ロー氏なのであった。

このように、独仏和解がその後のヨーロッパの平和と安定にもたらした意義は大きい。スイスのヘンリー・リーベン氏（ジャン・モネ財団理事長）の次の言葉にそれが現れている。「米国のアイゼンハワー大統領によるマーシャルプランがヨーロッパの経済的再建の基礎となり、そして、紛争の火種となる石炭と鉄鋼を共同管理するシューマンプランがヨーロッパの平和と安定の基礎となり、ひいては精神的な和解をも推進したものとなった。今後、この和解へと至った過程で得たさまざまな知恵を、国際社会全体において共有していく方策を練るべきである」

#### アフリカの経験から

今回の会議で、一人のアフリカからの参加者がこう語っていた。「アフリカ人以外の人々は、アフリカが現在抱えている数々の紛争、貧困、飢餓等のために、アフリカのことをお先真っ暗な暗黒の大陸だと思っているが、われわれにとってはむしろ今が一番良い時なのである。なぜなら、やっと、自分たちの手で歴史をつくれる時が来たのだから」。この言葉は、次のようにも聞こえる。アフリカは、かつてはずっと平和な土地だった。ただ、ここ何百年の間に、違う文化を持つ人間が入ってきて少し混乱しているだけで、またわれわれの手で元に戻せばいいのさ、と。実際、「アフリカの経験から」と題して行われたこのセッションでの議論は、その抱える問題の深刻さを把握した上でなお、希望に満ちたものであった。ここでの議長を務めたジョセフ・ラギー氏（スーダン元副大統領）の「アフリカには世界の問題も希望もすべてある。平和は自分の中からのみ生まれるのだ。心を開いてアフリカの問題を話し合い、そして世界を語り合おう」との言葉がそのことを物語っている。

ベスエル・キブラガト氏（ケニア元外務事務次官）は、アフリカでの紛争解決において重要なこととして、五つの点を挙げた。第1に、問題を解決し平和を構築するためのチャンネルを開くことが肝心であること。現在アフリカには、政治

の代表権の不公平、権力闘争、経済格差等さまざまな問題が存在し、それらが紛争を生み出す原因となっているが、このような問題を処理するチャンネルがふさがれている時に紛争は発生するのである。第2に、これらの問題の責任はアフリカが負わねばならないこと。すなわち、問題はアフリカ自らが解決していかなければならないのであって、そのためには一人ひとりが希望を失ってはならない。そして周りの人たちには、紛争解決のための活動に対しての支援や勇気付けをしてくれるように望みたい。第3に、一人ひとりの心から紛争の原因を取り除いていく必要があること。和解、傷の癒しということを、紛争の解決において十分考慮していくことが必要である。第4に、問題に焦点を当てた長期的な努力が必要であること。場当たりの対応ではなく、グローバルな視点により安定へのシステムを構築しなければならない。そしてこの場合、時間が必要である。第5に、紛争においては過去へ目を向けることが多いが、将来に目を向けることを忘れてはならないこと。過去の光が強すぎると、未来が見えなくなるのであるということを肝に銘じなくてはならない。

ではアフリカの将来を見通す上で、コーの会議の意義はどこに見いだされるのだろうか。ソマリアのユスフ・アル・アザリ氏（元駐米大使）は、政治犯としての6年間の牢獄生活の中で見いだしたのは、平和を創造することとは一人ひとりの人間による内なる心との戦いであり、そのためには道義的な愛情と許しが必要だということであると述べた。そして現在も権力闘争に明け暮れ内戦が続くソマリアにおいて大切なのは、皆がプライドを捨て寛容になること、すなわち許しを実践することであると述べ、「内戦においてはすべての者が敗者である」との言葉を残した。アノマ・ング氏（カメルーン元厚生大臣）は、かつてこの国が英仏対立の犠牲となった歴史を持ち、現在でも国内の英語圏とフランス語圏の勢力とが

写真●MRAコー会議風景



対立を続けていることを説明し、今こそ、ヨーロッパでの独仏和解を参考にして、国内の「英仏和解」を進めることが必要であるとした。そして、この和解を成功させ、中央ア

フリカに位置するカメルーンが「アフリカのコー」となるべく努力していくことを宣言した。次に、エリトリアから参加した行政官は、「数年前に23年間続いたエチオピアとの紛争が終結した。和解とは、より多く被害を受け、より多く犠牲を払った側の方が、より多く許しを与えることである。また、そのために人間は変わることができるのだ」と述べた。これらはまさにMRAの精神そのものであり、このコーでの会議の歴史の成果は、紛争が多発するアフリカにおいても着実に受け入れられ、広がっていると言えよう。

決して性急に答えを出そうとはせず、しかし希望を捨てない彼らの姿勢は、彼らなりの問題解決へのアプローチの方法である。そしてこれは伝統的に形成されてきたものであって、彼らにとって最も適した方法であるに違いない。その上でなおMRAの行動規範が受け入れられているということは、それが宗教、民族、文化等の違いを超えて普遍的価値として受け入れられるものであることの証であると言えよう。

#### 歴史の傷—事実認識と癒しを求めて

4日目には合計七つのワークショップが開かれた。その一つが、標記のテーマによって相馬雪香氏（㈱国際MRA日本協会副会長、日韓女性親善協会会長）が主催したものである。氏は、事実認識の重要性について、「ひがみ」の心理によって引き起こされる行動の危険性を論ずることで説明した。ひがみとは、他人には馬鹿にされたくないという心の痛みであり、日本の歴史の中には、ひがみにより引き起こされた悲劇が散見されると言う。氏は例を二つ挙げたが、一つは、日本が中国大陆での戦争を執行したことである。日本は古くから中国の文化を輸入してきた。日本語が文字を得たのも中国の漢字があったからであり、元来、中国は日本にとって偉大な国であった。しかし、中国に対する畏（おそ）れの気持ちがひがみへと変化していき、それによってこの戦争が引き起こされたのではないかと推測する。そしてもう一つが、日本が第二次世界大戦において枢軸国側に立ち、米英に戦いを挑むことになったことである。その当時において、日本はほとんど資源を持たず、他国との協調の上のみ成り立つ国であるから開戦すべきではないと主張する者たちもいた。しかしほとんど

の日本人が、何かにつけて日本を押しえ込もうとする米英の動きを、自分たちが馬鹿にされているように感じ、そして逆に日本を大切にしたいドイツ、イタリアの態度に有頂天になってしまったのではないかと推測する。これらはまさにひがみにより引き起こされた悲劇であり、このような悲劇を招かないために必要なことは、正確な事実認識がなされることであるとした。歪(ゆが)んだ認識は誤解を生むし、時にはそれにより大衆を扇動することもあるのである。

氏は、ひがみの心理が引き起こす行動の危険性を訴えることで、事実認識の重要性について述べた。これは見方を変えれば、ひがみを起こさせないこともさまざまな種類の争いを防ぐ手段になるのではないだろうか。太平洋戦争が引き起こされた原因については、いくつもの見方がある。しかし少なくとも、ほとんどの日本人がひがみを感じ持っていたとするならば、先の戦争を防ぐためには、ひがみを持たないことと持たせないことの両方が必要だったと言える。そして、ひがみを持たないことは事実認識により、そして、ひがみを持たせないことは他人に対する偏見や差別の意識を捨て去ることによって可能なのである。

実際に事実認識を進める試みとして、最も重要で影響力のあるものの一つに教育がある。このワークショップにおいて司会を務めたドイツのブリギッテ・ロア氏(チュービンゲン大学講師)が、次のように述べた。「歴史の傷を癒すということは、事実認識を進める努力により遂げられるのである。その意味において、教育の果たす役割は大きい。実際、戦後の独仏和解の中で、ドイツの教育内容の改善が果たした役割は大きかった。また、教科書における事実認識の試みと同時に草の根レベルでの試みも進んでいったことや、政治指導者がドイツの犯した罪を謝罪し和解を求めたことの意義も大きかった。歴史は幾層にも重なっており、いくつもの視点がある。歴史を見る上で新しい事実や視点が出現する度に、それらにより歴史を書き直すのではなく、それらを取り入れてそれ全体をヨーロッパの歴史としていくことが重要であろう。そしてこのような事実認識の試みが和解を生み出していくのである」。

現在の日本においては、その歴史、特に太平洋戦争をめぐ

る歴史を認識する際に、日本にとって都合の悪い部分についても良い部分についてもそれらが事実として認識されることが難しく、結局、どっちつかずの細い橋を渡るような認識の方法しか取ることができない。相馬氏が言うように、日本人一人ひとりが「何が正しいのか」という規範によって自分たちのあり方を見つめることが大切であろう。

## 終わりに

米ソによる冷戦構造が崩壊し、世界各地で地域紛争が多発している。それらがすべて宗教、民族、文化等の違いによる対立が直接の原因となっているかどうかは明らかではない。しかし、今後の経済活動の活発化や科学技術の発達によって、人々がさまざまな属性を持った人間と接触する機会が急激に増大していくことは確実である。ということは、何もしなければ、紛争発生 の直接間接の原因が増えることはあれ少なくとも減っていくことはないのである。このような状況の中であって、現在の紛争を解決するにはどうしたらよいのだろうか。そのためには、民族、宗教、文化等の違いを超えて、人間の道徳心により探求される普遍的な価値の体系を構築し、それに基づいて行動していくことが必要である。そして普遍的な価値というものを見つけていくには、できるだけ多くの人間が集まり、心を開いて率直に語り合うことが必要である。そうした対話と交流の中でこそ、共通の普遍的価値を一つずつ確認していくことができるのである。コーでの対話と生活は、まさにそのような試みそのものであると言える。今後もこの会議が果たしていく役割は大きい。

スイスのジュネーブから列車で1時間ほどで、レマン湖畔の街モントルーに着く。そこから登山電車に乗り換え、急な斜面を登って行くと、すぐに眺望が広がり湖を眼下に見下ろすようになる。山の中腹にあるコー・マウンテンハウスの周囲は静寂に包まれ、自己の内なる声に耳を傾けるには最適の場所である。そしてここからの眺めは、地上での争いなど取るに足らないものであるように思えてくるほど美しい。この場所で、さまざまな人たちが生活を共にし、互いに対話と交流を重ね、そして皆が希望に満ちて山を下り、再び自分たちの住む所へと帰って行くのである。(こんどう とおる)